第13回連続講座

『いのち』を考える

悲しみとともに生きていく

① 1月24日(火)

藤井 理恵

淀川キリスト教病院
チャプレン（病院牧師）

たましいの痛みに寄り添う
～ターミナルケアの現場から～

ターミナルケアの現場では様々なたましいの痛み(問い)が発せられます。「どうして病気になったの?」「私の生きる意味は何?」。厳しい現実の前に立ちつつも、人間を超える存在(神)との関係から答えを見いだした方々の教えてくださったことを分かち合いたいと思います。

② 1月31日(火)

田村 里子

一般社団法人WITH
医療福祉実践研究所
がん・緩和ケア部 部長

いのちに寄りそう
～悲しむ人のかたわらで～

緩和ケアの相談を通し、悲しみの中にある方たちから、多くのことを教わってきました。最期の時、今まで生きてきた事と今あるいのちに向き合うご本人、見つめるご家族、そして看取り後のご遺族、それぞれの言葉から、「いのち」を考えたいと思います。

③ 2月7日(火)

末永 和之

すえなが内科在宅診療所院長

まるごといのち
～悲しみを乗り越えて
生きるために～

私たちは無限の世界からいのちをいただき人生を歩み、その歩みの中で予期しない悲しみに出会い、この悲しみの中で希望を見いだし生きていかなければいけません。その瞬間まで自分のいただいた人生に意味を見いだして実存を感じて生きることが大切と思います。

④ 2月14日(火)

細井　順

公益財団法人近江兄弟社
ヴォーリズ記念病院ホスピス長

生死を超えた
『いのち』にであうとき
～かなしみから教わること～

私は外科医として病気を治すことを18年間やりました。その後、治せない患者さんとどのように向き合えばいいのかを悩むうちに、ホスピス医に転向して20年が経ちました。多くの方々の最期を見守りました。正直にいいますと、それは生やさしいことではありません。ただ、「いのち」が受け継がれていくと実感できたときに、生きることや死ぬことの奥義に触れたような気がします。

⑤ 2月21日(火)

米虫 圭子

京都産業大学学生相談室
主任カウンセラー

それぞれの悲しみ
～遺族の語りから～

大切な人をうしなった悲しみは一人ひとり違います。同じ家族の中でもそれぞれの悲しみ方があり、決してくらべることはできません。たくさんの方のお話をお聴きしていると、いろいろな「悲しみとのつきあい方」があることに気づかされます。ご遺族から教えていただいた生きていくヒントについてお話ししたいと思います。

⑥ 2月28日(火)

田村 恵子

京都大学大学院医学研究科教授
がん看護専門看護師

がんと共に生きる人を支える
～地域での取り組み～

多くのがん体験者が地域で暮らす時代を迎えています。私はこれまでの経験から、地域での暮らしにはどう生きていくのかについて考えることが大切だと思ってきました。平成27年7月より地域で生きる力を育み支え合う活動を始めました。共に『いのち』について考えましょう。

（敬称略）

※都合により急遽講演内容等を変更する場合があります。